

国立国語研究所学術情報リポジトリ

学校社会における敬語行動と規範意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉岡, 泰夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002920

学校社会における敬語行動と規範意識

言語変化研究部第一研究室
吉岡 泰夫

1. はじめに

敬語はことばの諸側面の中でも社会構造との関連が深く、それぞれの社会における対人関係把握の仕方やコミュニケーションのあり方についての社会的慣習が反映される。この調査研究では、学校社会で生活する中学生・高校生の敬語行動と規範意識に注目し、学校社会の敬語の特徴を探っていく。また、地域社会の敬語との関連や、企業などの職域社会の敬語との差異についても考察を加える。

日本語社会で生活する上で、円滑なコミュニケーションのための敬語習得は、中学生・高校生にとっても重要な課題である。この調査研究では、言語発達の観点から、中学生・高校生が敬語の面でどのような発達段階にあるかにも注目する。また、調査結果を踏まえて、敬語習得のための言語環境や効果的な話しことば教育についても考察を加える。

2. 敬語行動

2. 1. 尊敬語の使用意識

目上の話し相手の行為を話題にして言う場面での、尊敬語の使用意識をみてる。質問は、先生に対して「先生が帰られたあと雨がやみました」というように共通語の尊敬語「レル」を使うかどうか尋ねたものである。図1でその結果をみると、尊敬語を使うと意識する率は、大阪高校・女子の37%を筆頭にどの学校でも女子が男子を上回っている。学校別にみると高い順に大阪高校、東京高校、東京中学、山形中学となる。これはまず中学より高校が高くなることを示す。さらに方言敬語が複雑に発達している西日本で高く、簡素か、あるいはほとんど無敬語の東日本で低いとみることもできる。

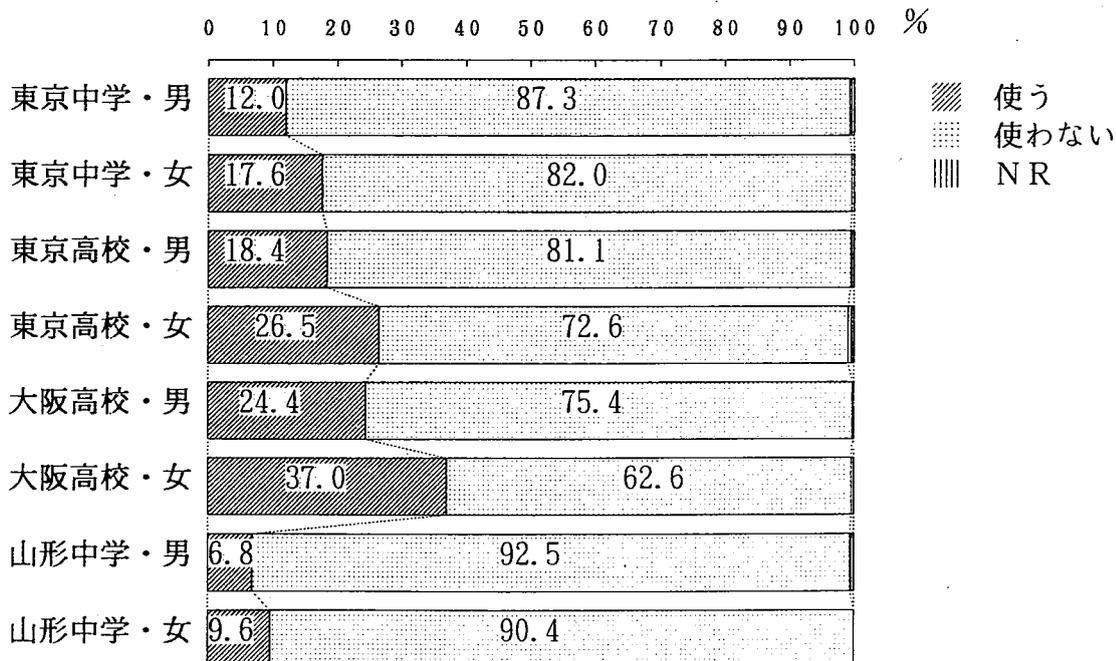


図1 先生に対して「先生が帰られたあと雨がやみました」(使用意識)

同じ場面での、方言敬語の使用意識を大阪高校についてみてる。近畿方言の尊敬語「

「ハル」の使用意識を尋ねた結果が図2である。ここでも女子が男子を上回っている。また男女とも現在より以前の方が使ったと意識している。

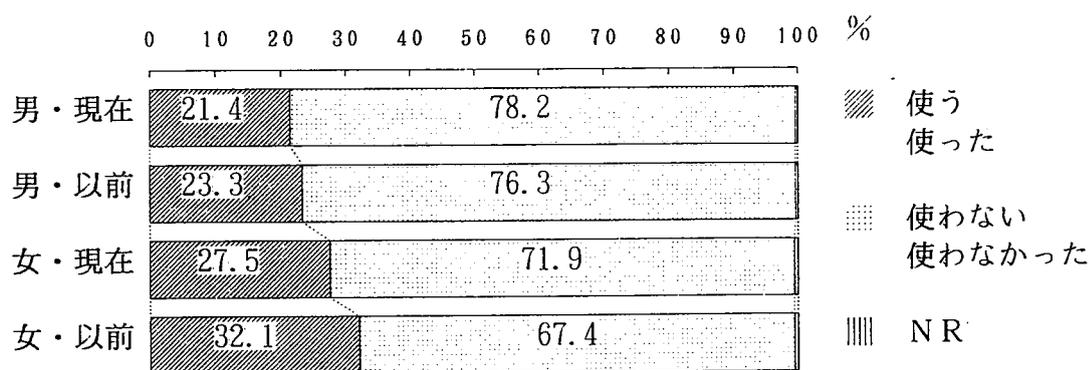


図2 先生に対して「先生が～ハル」(方言敬語使用意識・大阪高校調査)

2. 2. 尊敬語の使用

目上の話し相手の行為を話題にして言う場面での尊敬語は、具体的にどんな形式を使用するかみてる。図3は、先生に対して「自分は行くけれども、先生は行くか」という内容をどう言うか、面接調査で尋ねた結果である。「イラッシャル」という敬意の高い形式が東京高校・男子(13.6%)をはじめ東京中心にわずかにみられるものの、全体的に見れば尊敬語の使用率は低い。大阪高校・女子で共通語敬語・方言敬語すべての形式を合わせて47.1%に達するのが最高で、低い方では山形中学の男女とも0%、東京中学・男子の3%が目立っている。山形中学ではこの場面で尊敬語を全く使っていないのである。学校別にみると高い順に大阪高校、東京高校、東京中学、山形中学となる。尊敬語の使用率は中学より高校が高いこと、また西日本が高く、東日本が低いことを示しており、使用意識の場合と同じ傾向がみられる。

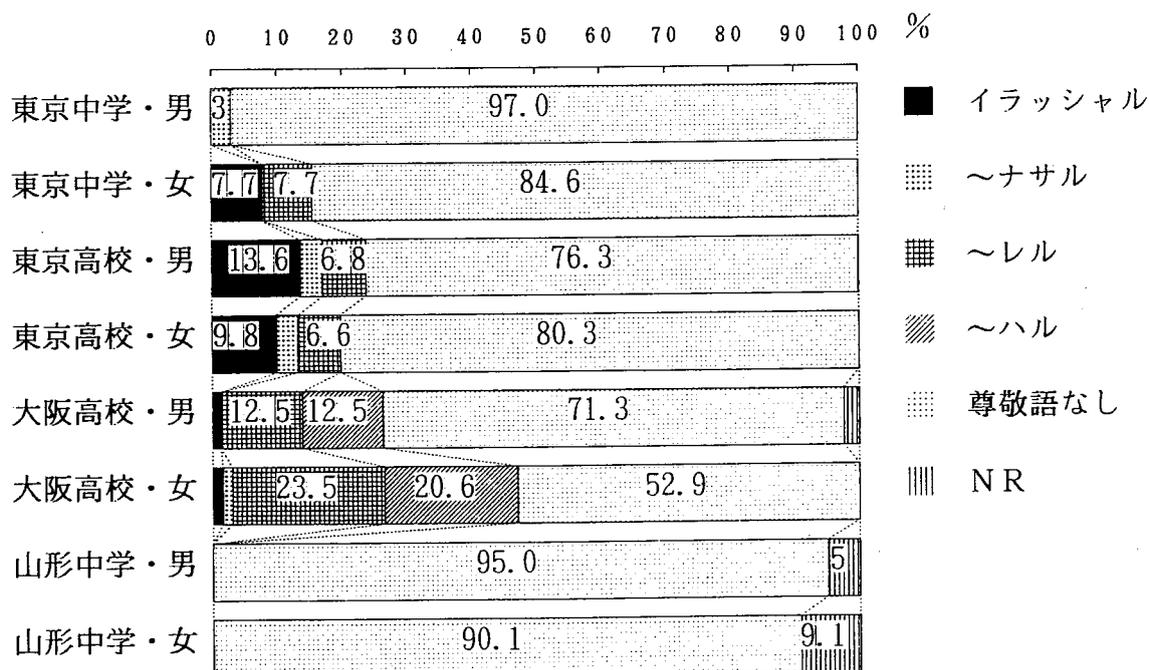


図3 先生に対して「先生は行くか」(尊敬語の使用)

使用意識と実際の使用の違いを、共通語敬語の「レル」と方言敬語の「ハル」についてみてみると、いずれも実際の使用は使用意識を下回っていることがわかる。つまり、使う

と意識しているほどには実際は使っていないのである。これは使用意識の方に、この場面では使うべきだとする規範意識がはたらくためと考えられる。

2. 3. 方言敬語発達地域における尊敬語の使用

敬語使用が方言敬語の地域差と関連があることが明らかになった。そこで、敬語行動の実態を方言敬語発達地域でみる。九州中央部の熊本は近畿中央部と並んで方言敬語が多彩な地域である（加藤・1973）。敬意の段階に対応する敬語形式がいくつもあって、こまやかな使い分けがなされている（秋山・吉岡・1991）。熊本県全域に隣接の福岡南部、長崎東部を含めたフィールドで、4世代を対象とした言語行動調査（1993年・被調査者総数702名）を実施した。

目上の話し相手の行為を話題にして言う場面での、尊敬語の使用をみた結果が図4である。ここでの10代は15歳以上の中学生・高校生男女約180名である。質問は、学校でも地域でも目上とされる校長に「今日は家に居るか」と言うときの「居るか」に相当する尊敬語＋丁寧語＋終助詞の形式を尋ねたものである。10代のところを図3と比較すると、尊敬語の使用率がきわめて高く、山形や東京で目立った尊敬語なしの言い方は、10代の女性で5.8%、男性で18.6%と僅かである。熊本の中高生の大多数は、目上の話し相手の行為を言う場面では尊敬語を使っており、しかも共通語敬語の使用率が高いという世代の特徴がみられる。女性は10代から40～50代まで共通語敬語を使う率が高く、10代（88.3%）と最高の20代（91.7%）がほぼ並んでいる。男性は10代（72.1%）が最高で、20代から方言敬語の使用が増加していき、40～50代で共通語敬語の使用を上回る。若い世代の特徴である共通語敬語の使用を詳しくみていくと、敬意の高い形式「イラッシャイマスカ」「ゴザイタクデスカ」の使用率が高いことがわかる。女性は20代（75%）、30代（74.2%）、10代（61.6%）の順に、男性は20代（45.8%）、10代（43%）の順になっている。

方言敬語発達地域の敬語行動の特徴をまとめると、若い世代では共通語形の、上の世代では方言形の、いずれも敬意の高い形式の使用率が高いということが指摘できる。

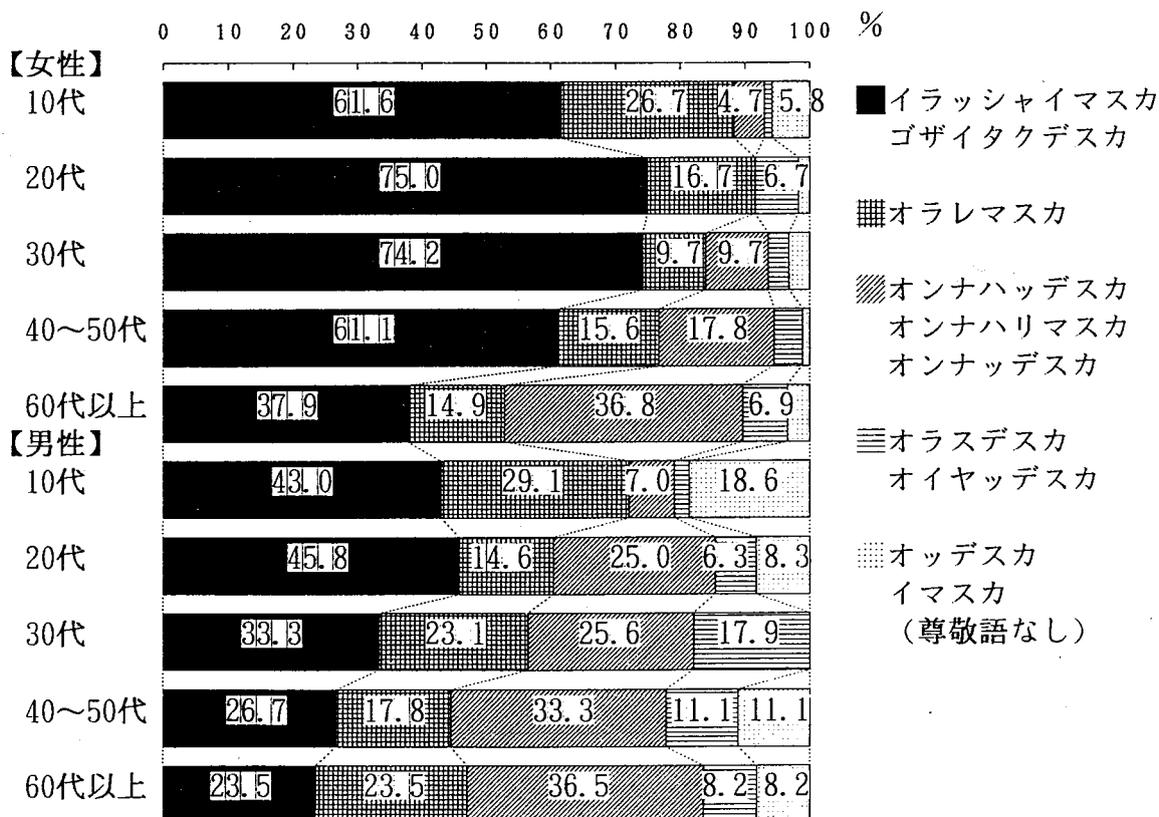


図4 校長に「今日は家に居るか」（敬語使用・熊本調査）

2. 4. 尊敬語の場面に応じた使い分け

話題の人物を待遇する尊敬語も、その人物が目の前にいる聞き手である場面（図3・図4）と、友人との話題に登場する人物である場面（図5・図6）とでは使い方が変わると考えられる。現代の敬語は話題の人物よりも聞き手への配慮によって使い分けられる傾向にある。中高生の場面に応じた対人関係把握と敬語の使い分けをみる。

図3と図5を比較すると、図3の場面で尊敬語の使用が少なかった集団では、図5の場面でも少なく、使い分けの幅は小さい。大阪高校では男女とも図5の場面になると方言敬語が共通語敬語を上回るようになってきている。尊敬語の使用率はほとんど変わらないが、その形式を使い分けしているのである。

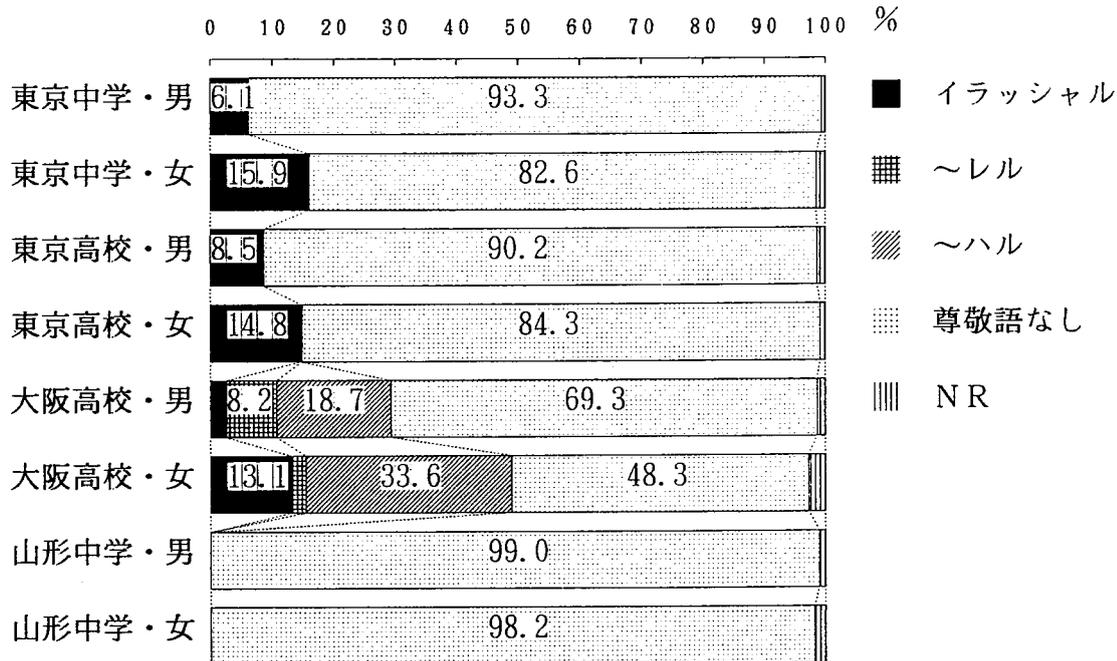


図5 友達に「先生は教室に居るか」（尊敬語の使用）

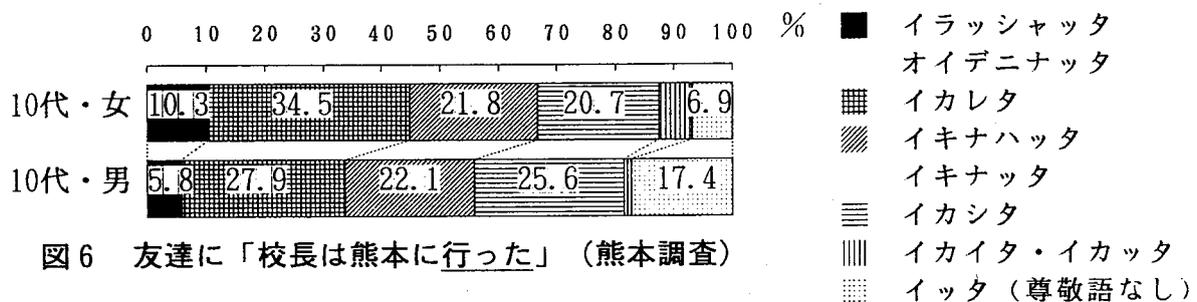


図6 友達に「校長は熊本に行った」（熊本調査）

熊本調査の図4と図6を比較すると、図6の場面では共通語で敬意の高い形式「イラッシャル」「オイデニナル」が大幅に減少して、方言敬語形式がその変種も使用率も増加している。尊敬語なしの言い方がきわめて少ないという点では場面差はない。聞き手によって発話のスタイルを切り換えるとともに敬語コードも切り換えているのである。

方言敬語発達地域では、目上の人物はたとえその場に居なくても尊敬語で待遇するという社会的慣習があり、それが中高生にも身につけている。方言スタイルで話す親しい聞き手の場面では目上の人物を方言の尊敬語で待遇し、目上の人物が聞き手である場面では、共通語スタイルに切り換えて敬意の高い尊敬語で待遇する。このように場面に応じて敬意の高い尊敬語も使いこなし、使い分けの幅も広い敬語行動がみられるのは、方言敬語発達

地域という言語環境が中高生の敬語行動の発達を促進しているためと考えられる。

2. 5. 謙讓語の使用と敬語知識

謙讓語は、話題の人物の相対関係において、行為者を低く待遇することによって行為の受け手に敬意を表すという、複雑な表現処理を要する敬語である。したがって、誤用も多く、現代の敬語では衰退の方向にあるとされる(宮地・1971)。

先生に対して「うちの母親が先生に話があると言っていた」と言う場面での謙讓語の使用をみえる。謙讓語「申す」を使うのは、東京中学で1.4%、東京高校で2.5%、大阪高校で0%である。大阪など西日本では、「言っていた」の「(～)いる」に対応する「おります」が謙讓語として使われているので、この文脈では共通語の謙讓語「申す」は使わずに、「言っておりました」と言うことも考えられる。それにしても中高生は謙讓語をほとんど使わないのが実情である。

高校生の敬語能力について熊本の3つの高校で調査した結果(吉岡・1986)から、敬語の語彙力をみえる。「言う・見る・来る・行く・する・食う」の6語をそれぞれ尊敬語と謙讓語に言い換えるという課題で、言い換えができた語の数の学校・性別平均は次のとおりである。

	済々高・女	済々高・男	人吉高・女	人吉高・男	九女高	全体
尊敬語	4.5	3.6	4.3	3.5	3.1	3.8
謙讓語	3.3	2.0	2.2	1.5	1.0	2.2

敬語形式についての知識は、若い世代ほど高く、10代後半から60代以上の年齢層の中で10代後半が最高であるという調査結果(国立国語研究所・1983)があるが、それも詳しくみていくと、謙讓語は例外的である。敬語の中でもっとも表現処理が複雑で、企業など職域社会を除けば衰退の方向にある謙讓語については、高校生も未習熟な状況にある。謙讓語を使うという敬語行動の習慣も身につけていないし、語彙力も低いと言えよう。

3. 敬語についての規範意識

どういう場面ではどういう敬語表現を選択・付加すべきかというルールが意識の中に形成されたものが規範意識である。形式も表現処理も複雑な敬語を使いこなす敬語行動を支えているのは、人が持っている表現のルールともいえるべき敬語の規範意識と考えられる。

方言敬語発達地域である熊本の中高生の敬語行動への習熟が注目されることから、その規範意識について調査した結果(吉岡・1995)をみていく。

敬語の規範意識については、具体的な場面と発話を提示し、それを聞いたときに適切と思うか、不適切と思うかの判断を尋ねた。その内容は敬語行動の在り方に関するものと、敬語形式そのものに関するものがある。ここで提示した場面と発話は、ことば遣いの「ゆれ」として問題になっているところであり、国語審議会でもその標準の在り方が審議されているところである。

図7は、母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」、という場面と発話についての判断である。話題の人物である校長の行為を言うところに尊敬語を使わない敬語行動である。話題の人物がその場に居なければ、それでよしとする判断もあり得る。現代では一般に、話し相手との関係では敬語の使い分けをするが、話題の人物との関係ではあまり使い分けをしないという傾向にある。このような敬語行動に対して10代の中高生の61.3%が不適切としている。話題の人物がその場に居なくても尊敬語を使うべきだと意識する率が高い。20～30代はもっとも高く85.4%である。

図8は、社員が会議で「社長もそのように申されます」、という発話の敬語形式「申される」についての判断である。謙讓語「申す」に尊敬語「れる」が付加された形式が、尊敬語を使うべきところで使われたものである。10代中高生は52%が適切としており、不適切は27.7%で4世代の中でもっとも低い。このことは中高生が謙讓語の知識も低く、使用にも未習熟であることと関連があり、謙讓語の規範意識が確立していないためとみることができる。なお、この敬語形式は文化庁の「国語に関する世論調査」(文化庁・1995)では「気になる」が41.4%、「気にならない」が54.2%となっている。

図9は、集会で司会者が「会長がお書きになられたものです」という発話の敬語形式「お書きになられる」についての判断である。「お～になる」という尊敬の形式に、さらに尊敬語「れる」が付加された二重尊敬の形式である。20代以上の世代でも適切が不適切をやや上回っているが、中高生は不適切が21.4%、適切が63.6%と二重尊敬を許容する率が高い。この二重尊敬の形式は文化庁の世論調査では「気になる」が23.6%「気にならない」が73.2%であった。

図10は、会議で司会者が「おっしゃられたとおります」という発話の敬語形式「おっしゃられる」についての判断である。尊敬語「おっしゃる」にさらに尊敬語「れる」が付加された二重尊敬の形式である。同じ二重尊敬の「お書きになられる」よりもう一段許容される傾向にある。不適切とするのは中高生の19.7%が4世代の中でもっとも低い。二重尊敬「おっしゃられる」は文化庁の世論調査では「気になる」が24.5%、「気にならない」が71.9%であった。

図11は、テレビのアナウンサーが「政局の混乱が続きますですね」という発話の二重丁寧「ますです」についての判断である。これは不適切とする率が圧倒的に高く、10代（72.3%）も40～50代（75%）と並んでいる。

図12は、事務所の受付が部長を訪ねて来たよその会社の社長に「部長さんは今、工場にいらっしゃいます」という場面と発話についての判断である。身内のことを外の人に話す場面では、たとえ身内が話し手にとって目上であっても謙譲語を使うという習慣が、企業など職域社会では徹底しているようだ。しかし、学校に電話をして「〇〇先生はいらっしゃいますか」と尋ねると、その学校の成員である学生、先生、事務のほとんどの人から「はい、〇〇先生は今、お部屋にいらっしゃいます。しばらくお待ちください」と返ってくる。外部の人をお客様として待遇する職域社会とは違った、学校社会の敬語の習慣である。外の人に向かって身内を尊敬語で待遇する敬語行動に対して、不適切とする率はきわめて高く、20～30代で92.7%、40～50代で86.6%にのぼる。中高生は50.3%と4世代の中でもっとも低い。この差は職域社会の成員であるか、学校社会の成員であるかの違いが反映されたものとみられる。

図13は、母親が担任の先生に「うちの子はいつも7時に起こしてあげます」という発話の「あげる」についての判断である。「やる」では品がないので美化語のつもりで謙譲語「あげる」を使ったものである。謙譲語であれば行為者である母親がへりくだり、行為の受け手であるうちの子に敬意を表すことになる。「あげる」は謙譲語であるか美化語と認められるか、現代の敬語でゆれているところである。不適切とする率はきわめて高く、40～50代で89.5%、20～30代で88.2%にのぼる。中高生も63%が不適切としている。

なお、文化庁の世論調査では、「うちの子にあげる」を使うのは全体で35.8%、男性は29.3%、女性は41.4%である。10代女性がもっとも高く71.4%である。地域別では関東の47.2%がもっとも高い。

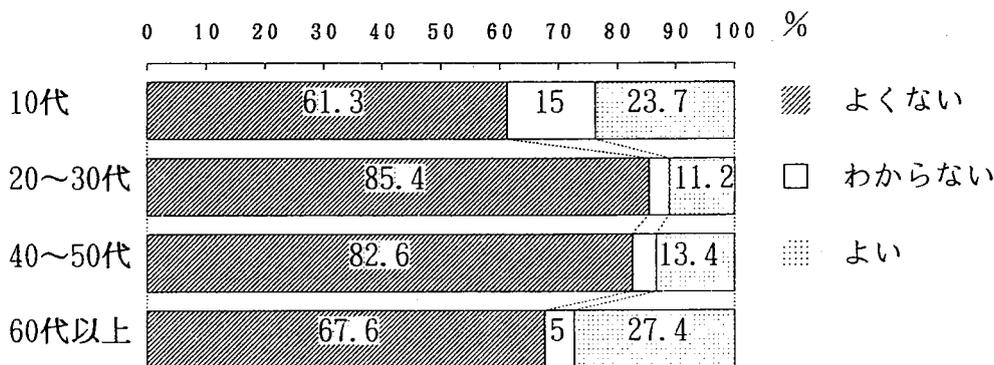


図7 母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」

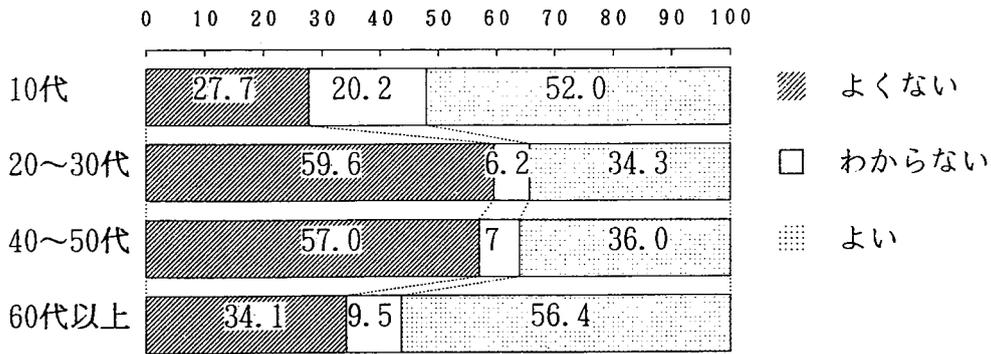


図8 社員が会議で「社長もそのように申されます」

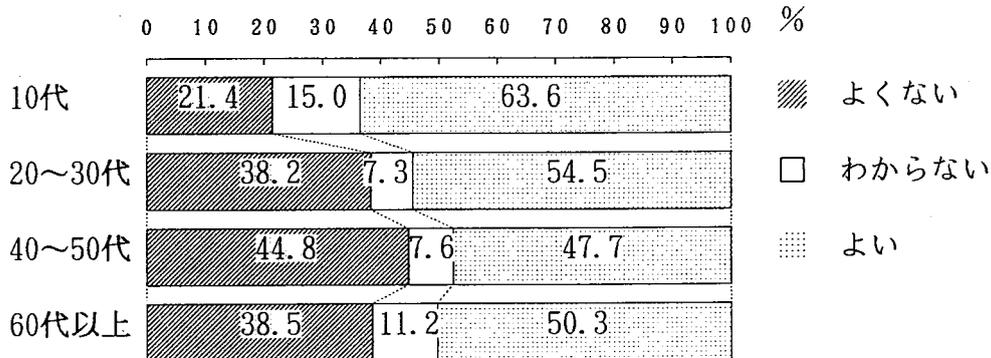


図9 集会で司会者が「会長がお書きになられたものです」

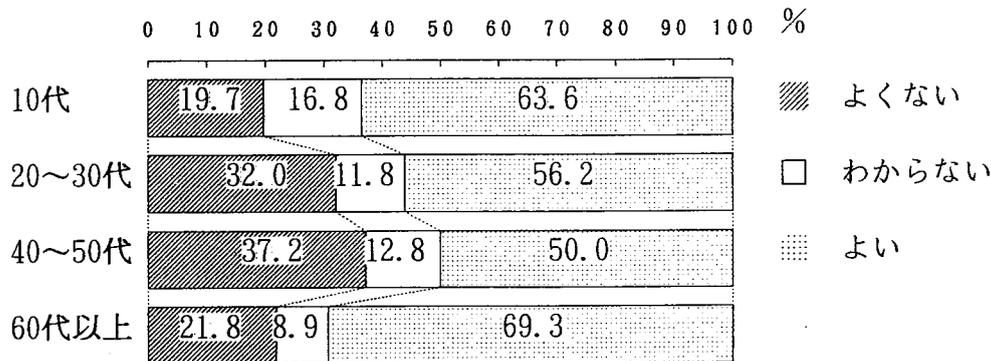


図10 会議で司会者が「おっしゃられたとおりです」

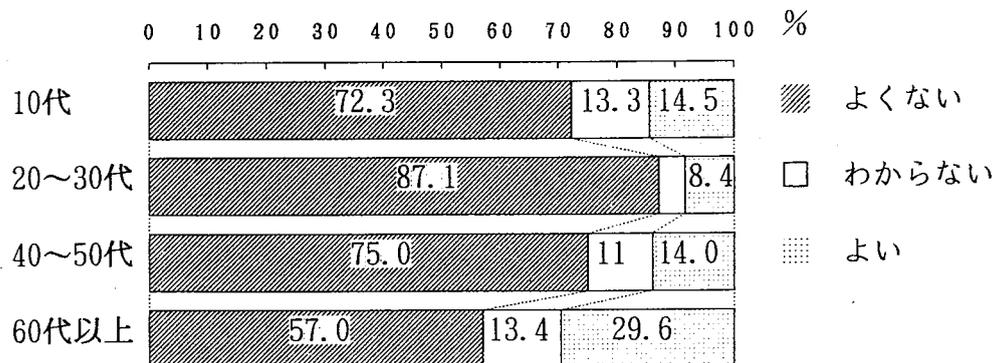


図11 テレビのアナウンサーが「政局の混乱が続きますですね」

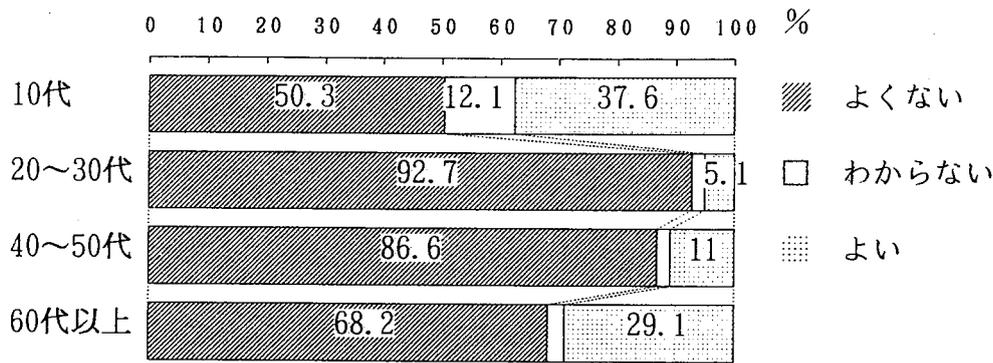


図12 事務所の受付が部長を訪ねて来たよその会社の社長に「部長さんは今、工場にいらっしやいます」

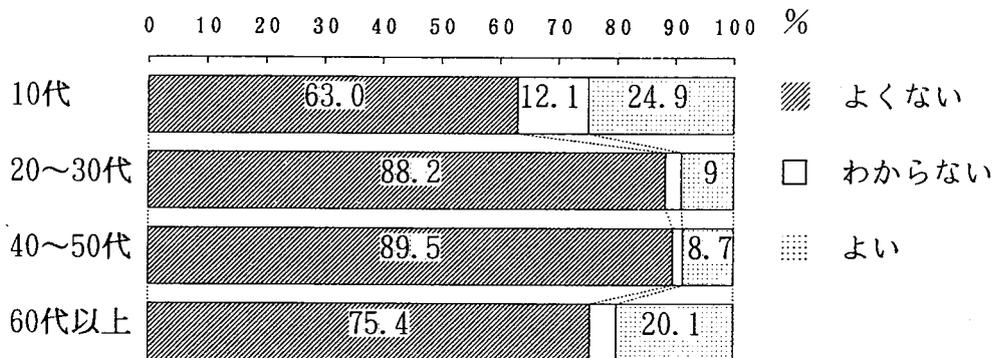


図13 母親が担任の先生に「うちの子はいつも7時に起こしてあげます」

以上、図7から図13までの場面と発話に不適切という判断を下した人は、敬語形式や敬語行動の在り方について厳格な規範意識を持っている人である。このような規範意識の厳格さに、どんな要因がどのように関わっているか要因分析を行った結果（吉岡・1995），次のことが明らかになった。

- ・規範意識が厳格かそうでないかを社会的属性でみると、学歴・職業・世代で大きな差がひらいている。高学歴層や第三次産業従事者層は厳格であり、10代中高生はゆるやかである。
- ・規範意識と敬語使用には高い相関があり、規範意識が厳格な人は敬意の高い敬語形式を使って、ていねいな敬語行動をしている。
- ・敬語に気を遣う必要があるという意見を持っている人は、規範意識が厳格である。

4. 敬語についての意見

中高生は敬語の必要性についてどういう意見を持っているかみてみよう。

図14は、東京・大阪・山形の中高生に、学校生活で敬語は必要と思うか尋ねた結果である。学校生活での敬語の必要性を認める意見がどの学校でも7割前後を占めている。特に女子の必要性を肯定する意識の高さが目立つ。

図15は、熊本の3つの高校（済々高・人吉高・九女高）の2年生に、敬語についての意見を尋ねたものである。

1. 敬語を知らないと、現代社会でもやはり困ることが多い。

92.8%が肯定的で、敬語を習得することが社会生活を営む上で必要であるとする意識がきわめて高いことがわかる。高校生の敬語習熟への達成動機の高さが伺われる。

2. 敬語は相手を思いやる心から生まれるものであるから、現代にも必要である。

80.4%が肯定的である。相互尊重の思いやりの心を伝える敬語のはたらきを重視して、必要性を認める意識がきわめて高いことがわかる。

3. 敬語は人間関係をうまく調整するものだから、これからの世の中にも必要である。
73.5%が肯定的である。敬語の人間関係調整の機能を重視して、必要性を認める意識が高いことがわかる。

4. 若い人は目上に対して、もっと正しい敬語を使って、ていねいであるべきだ。

63.5%が肯定的である。敬語は上下関係や親疎関係による使い分けがあり、現代では上下関係による使い分けが後退する方向にあるとされる。熊本の高校生は、上下関係による使い分けを重視して、若い人は目上に対して、ていねいな敬語行動をすべきだと意識していることがわかる。上下関係か親疎関係かという意識には地域差が関係しないか、東京・大阪・山形の中高生と比較してみる。図16は、先生や上級生に敬語を使うとよそよそしくなると思う、という上下関係による使い分けに消極的な意見を尋ねたものである。山形中

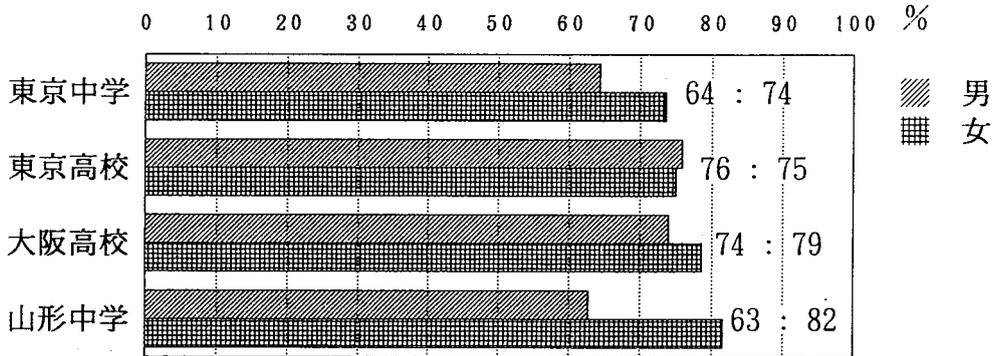


図14 学校生活で敬語は必要と思う

1. 敬語を知らないと、現代社会でもやはり困ることが多い。
2. 敬語は相手を思いやる心から生れるものであるから、現代にも必要である。
3. 敬語は人間関係をうまく調整するものだから、これからの世の中にも必要である。
4. 若い人は目上に対して、もっと正しい敬語を用いて、ていねいであるべきだ。
5. 敬語はむずかしいから、若い人が使えないのは無理もない。
6. 態度や気持ちがていねいであれば、敬語にはあまり気を遣う必要はない。
7. 敬語に気を遣っていると、自分の意思が正確に伝えられない。

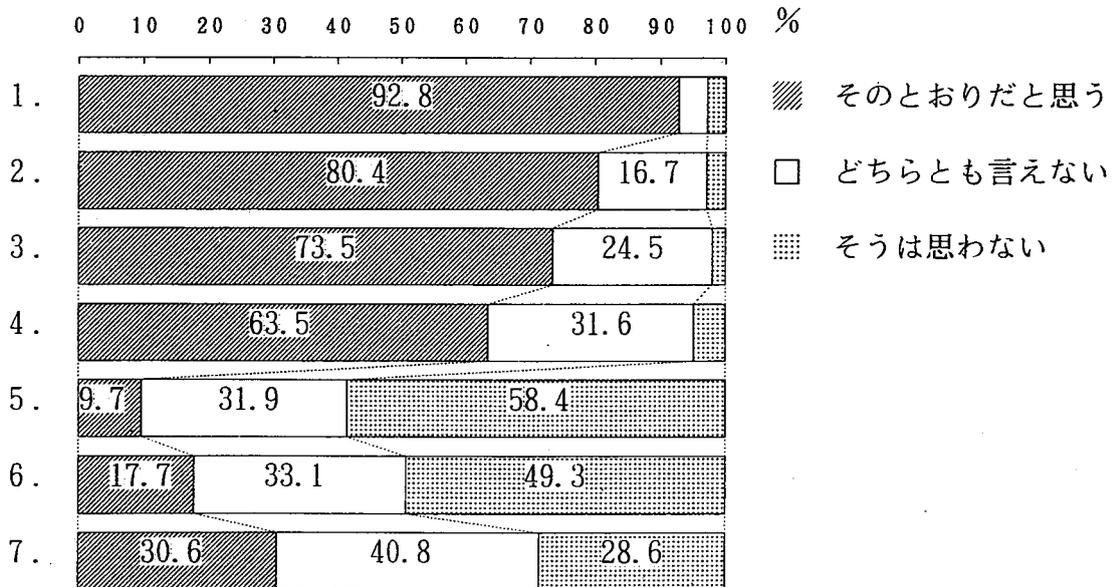


図15 敬語についての意見 (熊本3高校調査)

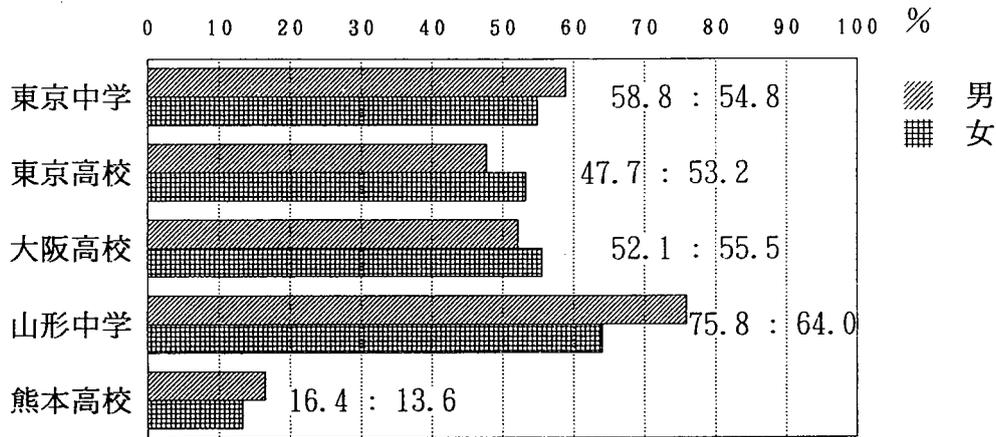


図16 先生や上級生に敬語を使うとよそよそしくなると思う

学がもっとも上下関係に消極的であり、東京・大阪もその傾向にある。熊本高校だけが他とは違って、上下関係に積極的な傾向をみせる。

5. 敬語はむずかしいから、若い人が使えないのは無理もない。

若い人の敬語未習熟を許容するか尋ねたものだが、許容する意見（9.7%）は少なく、許容しない意見（58.4%）が過半数である。

6. 態度や気持ちがいねいであれば、敬語にはあまり気を遣う必要はない。

敬語に気を遣う必要があるとする意見が5割を占めている。

7. 敬語に気を遣っていると、自分の意思が正確に伝えられない。

敬語に対する苦手意識を尋ねたものだが、意見が分かれている。

5. 円滑なコミュニケーションのための敬語習得

敬語を使いこなして、対人関係の様々な場面で円滑なコミュニケーションができることは日本語社会では必要なことばの力である。敬語の必要性について高校生の意見を、図15でみると、敬語を習得することが社会生活を営む上で必要であるとする意識、敬語の相互尊重の思いやりを伝えるはたらきや人間関係調整の機能を重視して、必要性を認める意識がきわめて高いことがわかる。高校生は敬語習得の必要性を切実に感じており、敬語を使いこなす円滑なコミュニケーションへの達成動機は高い。その一方で、フォーマルな場面でのコミュニケーションは苦手と意識している高校生は少なくない。図17は、目上の人と敬語をうまく使いこなして話すのが苦手とする理由を尋ねた結果である。「ことばは知っているが、場面に合った使い方がわからない」（34.2%）がもっとも多く、次が「どんな言い方をすればいいか、ことばを知らない」（21.1%）である。相手や場面にふさわしい敬語を使いこなすという実践的な話しことばコミュニケーション能力や、その土台となる敬語知識が身につけていないことによる苦手意識である。「目上の人そのものが苦手で、

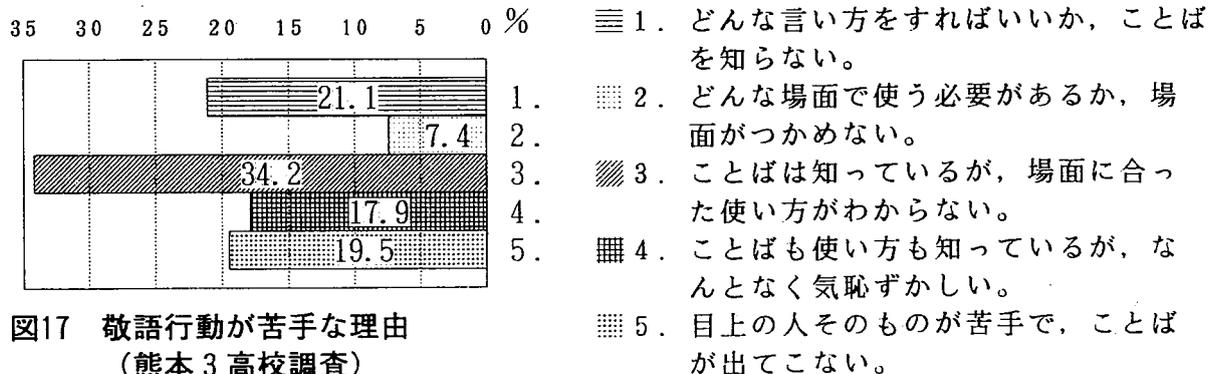


図17 敬語行動が苦手な理由
(熊本3高校調査)

ことばが出てこない」(19.5%)や、「ことばも使い方も知っているが、なんとなく気恥ずかしい」(17.9%)は、いずれも目上の人に対する人見知りによる苦手意識である。目上の人や知らない人とも真正面から向き合って、気後れすることなく話すという訓練の機会に恵まれなかったせいであろう。高校生の意見や意識が示している話しことばの重要課題は円滑なコミュニケーションのための敬語習得と考えられる。

〈参考文献〉

- 秋山正次・吉岡泰夫 1991 『暮らしに生きる熊本の方言』 熊本日日新聞社
加藤正信 1973 「全国方言の敬語概観」『敬語講座6 現代の敬語』 明治書院
国立国語研究所 1983 『敬語と敬語意識』 三省堂
文化庁 1995 『国語に関する世論調査』
宮地 裕 1983 「敬語をどうとらえるか」『日本語学』2-1 明治書院
吉岡泰夫 1995 「敬語行動と規範意識」 国立国語研究所報告110 『研究報告集』16